

Title	Dynamics of Language Contact—Assimilation Process of New Loanwords and Impact on the Existing Lexical System with special reference to Japanese and German Loanwords in English—
Author(s)	加野, まきみ
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45764
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"＞ 大阪大学の博士論文について ＜/a＞ をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	かの きむら まきみ 加野(木村)まきみ
博士の専攻分野の名称	博士(言語文化学)
学位記番号	第 18960 号
学位授与年月日	平成 16 年 6 月 28 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	Dynamics of Language Contact—Assimilation Process of New Loanwords and Impact on the Existing Lexical System with special reference to Japanese and German Loanwords in English— (言語接触のダイナミクス：借用語の英語化過程と既存語彙に与える影 響—英語における日本語とドイツ語からの借用語を中心に—)
論文審査委員	(主査) 教授 成田 一 (副査) 教授 岡田 伸夫 助教授 瀧田 恵巳 大阪大学名誉教授 中西 暉

論文内容の要旨

言語は内的・外的な圧力を受け、常に変化し続ける。その外的な要素の主なものは外国との接触による言語借用である。古英語から現代英語に至るまで、英語は膨大な数の語彙を外国語から借用してきた。日本語からも日本の開国前後頃から数多くの単語が英語に借用されてきたが、その数は現在もますます増加する傾向にある。近年、英語に借用されている語のうち日本語はフランス語に次いで 2 番目に多いと言われている。借用された語彙は発音・綴り・派生・品詞・意味等の各面で様々な変化を遂げ、次第に英語の語彙として広く浸透していく。本研究の特徴の一つは、このような借用語の定着過程に注目していることである。日本語からの借用語がどのようにして英語の語彙に定着していくのかを一般化し、他の言語からの借用語とどのように異なるのか、また共通に見られる現象は何かを明らかにするため、ドイツ語からの借用語を取り上げ比較・対照する。

現在、英語辞典に登録されている日本語からの借用語は 700 語以上にのぼり、英字新聞や雑誌では日本語からの借用語がしばしば使用されている。本研究では日本語が借用されてから英語の語彙に定着するまでの一般的プロセスを *Oxford English Dictionary 2nd ed.* (1993、以下 *OED2*) の CD-ROM を中心とした英語辞書の記述や用例から導き出し、*TIME ALMANAC* (1995) や *The Times Internet Version* (1996) などのコーパスを利用して検証する。

英語辞書で借用直後から現在までの用例の変遷をたどり、借用語の時間的な推移を見てみると、日本語からの借用語は以下のような経路をたどり英語の語彙として受け入れられていくことが判明した。つまり、日本語からの借用語は、

1. まず、発音・綴りが英語の規則に従った形に変化し (e.g., *seppuku* [sɛpú:ku:], *jinrikisha* → *rickshaw*)、
2. 次に、名詞が限定詞的な用法を獲得して複合語を形成し (e.g., *bonsai tree*, *adzuki bean*)、
3. さらには、接辞付加や品詞転換により新たな語を派生する生産性を獲得する
(e.g., *kimono blouse/coat/gown/shirt/sleeve*, *Shinto* : *Shintoistic/Shintoism/Shintoist/Shintonize*) 。

4. 最終段階では、意味の拡大・転換により、多義を持つようになり、英語の語彙として浸透し、広く使用されるに至る (e.g., *tycoon* 「大君 (将軍)」 → 「実業界の巨頭」、*kamikaze* 「神風特攻隊」 → 「向こう見ずな」)。

しかし、意味転換がみられるほど英語化した日本語からの借用語はまだほんのわずかで、英語に定着した日本語の数の少なさを表している。

上記のように導き出された英語化の過程を検証するために、先述の二つの英語コーパスで日本語からの借用語が実際にどのように使用されているかを調査した。英語化が進んでいると思われる語を中心に検索した結果、固有名詞や専門用語を除けば、大半が辞書から導き出された結果と合致したが、新たな意味転換の例や辞書には登録されていない派生語も発見され、辞書の記述をアップデートすることができた。

ドイツ語からの借用語についても同様の分析を行い、日本語からの借用語の英語化過程との比較を行った。辞書は日本語からの借用語の分析同様、*OED2*をはじめとする大型辞書を用い、コーパスに基づく分析では1億語の英語の話し言葉と書き言葉からなる *British National Corpus* (以下 *BNC*) を用いた。その結果ドイツ語からの借用語は日本語からの借用語に見られたような4段階の英語化過程を経るのではなく、様々な側面から順不同に、あるいは同時に英語化が進んでいくことが判明した。

ドイツ語からの借用語の発音の変化には、借用後早い段階で起こる基本的変化 (e.g., 'o' [ɔ] → [o], 'b' [p] → [b]) と、それより後に起こる、あるいは変化せずに維持される傾向の強い音素がある (e.g., 'a' [a], 's' [z])。日本語からの借用語にはすべての語に対して強勢付与が必要であるが、ドイツ語からの借用語はドイツ語の強勢を保持することが多い。活用語尾の有無、規則性については、日本語では複数語尾が付かない語や集合名詞として扱われる語が多いが、辞書による分析の結果、ドイツ語の場合は原語の複数語尾を保持しているもの、英語の規則に則したもの、その両方の複数形をとり得るものの3種類があり、英語の規則に従わない複数形の割合は日本語よりも多いという結果になった。しかしコーパスでの検証では、実際の英語のテキストにはギリシャ語・ラテン語源でドイツ語経由で借用された語と、ごく限られたドイツ語起源の語しか不規則変化の複数語尾を伴って使用されることはないことが分かった (e.g., *schemata*, *Lieder*, *wunderkinder*)。

生産性の獲得に関しては、日本語は語を説明するような限定詞的用法が多く見られるが、ドイツ語からの借用語には辞書で確認された数は少なく、コーパスでそれ以外にも数例確認されたものの、日本語からの借用語のように繰り返し用いられる例はほとんど観察されなかった。ドイツ語からの借用語においては限定詞的用法は英語化過程の一段階とは見なされないことが判明した。ドイツ語からの借用語は日本語からの借用語よりも高い割合で自由な語形成を行う生産性を獲得している (e.g., *gestalt*, *polka kindergarten*)。しかも生産性の獲得よりも意味変化が多く、日本語からの借用語より圧倒的に高い割合で観察された (e.g., *blitz(krieg)*, *Gestapo*, *Götterdämmerung*, *kraut*)。このことから日本語からの借用語のように、生産性の獲得が意味変化の前段階にあるという体系は成り立たないことが判明した。つまり、ドイツ語からの借用語は、語によって異なる側面から英語化が進み、時には複数の変化が同時進行することもあるので、日本語のように共通した4段階を提示することはできない。しかし、生産性を持ち、複数の意味を持つ、高い英語化の段階に至るまでには、音韻的变化・不規則変化語尾の規則化などはほぼ終了していることが明らかになった。

本研究のもう一つの特徴は借用語が英語に定着していく過程で既存の語彙体系に与える影響を取り上げたことである。借用によって新しく英語の語彙に加えられる語が、英語に定着するまでの変化の過程を捉えるだけでなく、借用により既存の語彙体系がどのように変化していくのかという側面にも注目することによって、言語接触の結果、生じる借用という現象の全体像を、導入される語彙と受け入れる語彙体系の両側面から描き出すことができる。借用語が英語の語彙に加わると、総語彙数が増加するだけでなく、借用元の言語の活用規則を保持し、英語としては不規則な複数形語尾を持つ名詞や、単複同形の名詞など不規則変化の語彙の増加にもつながる。

さらに、借用語の中には英語の既存語彙の中に同じ意味を持つ語彙が存在するものや、英語化の結果、既存語彙と同じ意味を持つようになるものがあり、借用語と既存語彙で同義語のペアまたはグループが生まれる。同義語間で用法に競合が生じると、意味や使用範囲の棲み分けが起こり共存関係が構築されることや、既存語彙が借用語に置き換えられるなどの現象がみられる。この様な競合関係を分類し、*OED2*をはじめとする英語辞書の記述や *BNC* などの

英語コーパスからの用例を基に以下の分析を行った。

- ・主に出現する分野・媒体の特徴を探るために、それぞれの分野・媒体での *frequency per million* (百万語中に何回出現するか) を比較。
- ・*log-likelihood* (ある語の前後に現れる語との結びつきの強さを表す統計値) を用いて、それぞれの語のコロケーションパターンを抽出。

その結果、借用語と既存語彙の競合は以下の4パターンに分類できることを解明した。

1. 借用語が限定的な使用範囲を持つ (e.g., *honcho* < *boss, leader, kamikaze* < *reckless, self-destructive, tsunami* < *tidal wave*) 。
2. 借用語がより広い使用範囲を持つ (e.g., *harakiri* > *disembowel(ment), glockenspiel* > *carillon, shiatsu* > *acupressure*) 。
3. 既存語彙と借用語が重なる使用範囲を持ち共存する (e.g., *doppelgänger* ⇔ *wraith, tycoon* ⇔ *magnate, realpolitik* ⇔ *practical politics*) 。
4. それぞれが異なる使用範囲を持つ (e.g., *angst* ⇔ | ⇒ *anxiety*) 。

この4つのパターンのうち、借用語と既存語彙の同義語のペアはパターン1の関係にあるものが多く、借用語がごく限られた分野でのみ用いられる専門用語としての地位しか持たないことが多いことが分かる。一方で、2、3、4のパターンの同義語ペアも複数存在し、中には様々な言語からの借用語と複数の既存語彙で同じ意味を表す同義語群を成し、それぞれ異なる使用範囲を持ちつつ共存するものや、借用語の頻度が既存語彙の頻度を大きく上回り、語彙の置き換えが起こりつつあるのではないかとと思われるものもあり、借用語が確実に英語の既存語彙体系を変化させていることを示した。

借用語と既存語彙の同義語ペアのケーススタディとして「実業界の巨頭」を表す *tycoon* と *magnate* を取り上げ、*OED2*, *BNC* を用いて分析した。使用される時代の範囲の違いや、使用される文脈やテキストの種類、支持する人物、同格の名詞の位置、主に使用される数(単・複)などにそれぞれ異なる傾向を持っていることを明らかにした。例えば、*tycoon* と *magnate* の前後に現れる語を頻度の高いものから並べると、それぞれの巨頭が力を持っている業界に違いがあることを示唆する語が並ぶ。両語に共通して現れる語はあるものの (e.g., *media, property*)、*magnate* は工業・産業の名前 (e.g., *industrial, oil, shipping*) と、*tycoon* は主にビジネス・マスコミ関係の語 (e.g., *business, publishing, film*) と共に用いられることが多い。さらに、*tycoon* と *magnate* のその他の同義語 (e.g., *mogul, baron, king, bigwig*) を取り上げ、同義語グループとしてそれらとの相互関係に焦点をあて、それらが使用される分野や共起する語の分布を示し、共存・競合関係を詳説した。

本研究では英語における日本語からの借用語とドイツ語からの借用語に焦点を当て、借用語に見られる形態的・意味的变化を捉え、それぞれの言語からの借用語の英語化の過程を解明した。また借用語が既存の語彙に与える影響の一つとして借用語と既存語彙の共存・競合関係を観察し、4つの競合パターンに分類した。現代英語において借用は新語彙導入の主要な方法ではないが、英語話者が他言語話者と接触する限り英語に新しい語彙を提供し続けるであろう。特に、増加傾向にあると言われている日本語からの借用語には、今後どのような語が加えられ、英語の語彙として定着していくのか、またそれらが既存の語彙体系にどのように影響を与えていくのか注目していきたい。

論文審査の結果の要旨

本論文の特徴は、借用語が英語に定着する過程における発音・綴り・派生・品詞・意味などの変化を捉え、さらに既存の語彙体系に与える影響を考察することにより、言語接触の結果生じる借用現象の全体像を、導入語彙と既存語

彙体系の両側面から描き出したことにある。方法論的には、借用語の定着プロセスや語彙の用法・分布などの競合の実態を、英語電子辞書（Oxford English Dictionary 2nd ed.）の大量の記述や用例から導き出し、それを膨大な電子コーパス（TIME ALMANAC や The Times Internet Version, British National Corpus など）によって検証している。この結果、従来の手作業では導き出せなかった事実を明らかにすることに成功している。

第1部では、日本語から英語への借用語の定着過程を、以下の4段階の英語化過程として一般化している。

1. 強勢付与、母音の強化・弱化などの発音・綴りが英語の規則に従った形に変化する。
2. 名詞が限定用法を獲得し、その語を説明する語を伴って繰り返し用いられる。
3. 接辞付加や複合語形成などにより新たな語を派生する生産性を獲得する。
4. 比喩的用法、意味の拡大・転換により、多義を持つようになり、英語の語彙として浸透し、広く使用されるに至る。

さらに日本語からの借用語が他の言語からの借用語と「どこが共通でどこが異なるのか」を明らかにするため、ドイツ語からの借用語を取り上げて比較・対照し、ドイツ語からの借用語が、4段階の過程ではなく、順不同あるいは同時に英語化が進むこと、そして生産性を持つ高い英語化の段階に至るまでには、音韻的変化・不規則変化語尾の規則化などがほぼ終了していることなど、日本語からの借用語との違いを明らかにしている。

ただし、借用語の定着過程を現象的に捉えるだけでなく、どうして日本語からの借用語では提案されているような4段階の英語化過程を辿り、ドイツ語からの借用語ではそれと異なる英語化過程を辿るのか、といったダイナミックな借用語定着メカニズムが十分に明快になっているとは言えず、そうした原理的な仕組みをさらに掘り下げる研究を展開することが期待される。

第2部では、借用語がその定着過程で既存の語彙体系に与える影響を検証し、借用語と既存語彙で同義語のペアまたはグループが生まれることを明らかにしているが、さらに分野・媒体ごとの頻度やコロケーションの分析を行った結果、借用語と既存語彙の競合・共存関係が以下の4パターンに分類できることを示している。

1. 借用語が限定的な使用範囲を持つ。
2. 借用語がより広い使用範囲を持つ。
3. 既存語彙と借用語が重なる使用範囲を持ち共存する。
4. それぞれが異なる使用範囲を持つ。

これにより、借用語がごく限られた分野の専門用語として扱われることが多い一方で、様々な言語からの借用語と複数の既存語彙が同じ意味を表す同義語群を構成し、それぞれ異なる使用範囲を持って共存するものや、借用語の頻度が既存語彙の頻度を大きく上回り、語彙の置き換えが起こりつつあると思われるものもあり、借用語が確実に英語の既存語彙体系を変化させている実態を示している。

以上のように、本論文は、大規模な電子化資料を活用して語彙借用現象を体系的に解明し、この現象に新たな洞察と知見を与えており、博士（言語文化学）の学位論文として十分価値のあるものと認められる。